

ルカの福音書 23 章 39-43 節

「十字架に屈しない自我」

讃美歌 258 貴きみかみよ

聖歌 402 丘にたてるあられずりの

聖書が教える救いとはいったい何か。今朝の箇所は短いですが、そこには救いのエッセンスそのものが教えられています。ここではふたりの犯罪人が登場していますが、十字架に架かっていた短い時間の間に、ふたりの間の決定的な違いが明らかになりました。

ひとりはイエスをののしり続けました。もうひとりはパラダイスに行くことができました。同じ状況にあったはずなのが、まったく違う結末に至ったのでした。何故ひとりはパラダイスに行き、もう一人は行けなかったのか、見ていきたいと思います。39 節。

39 節

十字架にかけられていた犯罪人の一人は、イエスをののしり、「おまえはキリストではないか。自分とおれたちを救え」と言った。

イエスの隣で十字架にかけられていたふたりの犯罪人の背景についてはほとんど分かりませんが、彼らは十字架に架けられていますので、ひどいことをしていたと見るべきでしょう。殺人を犯していたとしても不思議ではありません。

ふたりの犯罪人の発言の内容について入っていく前に、少しこの十字架刑について確認しておきます。

古代ローマにおいて、死刑は様々な形を取りました。たとえば、十字架以外にも、キリスト教徒が劇場で猛獣に食べられる描写を見たことがあるかもしれません。それ以外にもいくつかの処刑方法があり、それぞれの処刑に独自の特徴があったのです。

十字架について言えば、その目的は「多くの痛みを与えること」と「できる限り辱める」の二つでした。それが見せしめとなっていたのでした。

福音書においては十字架刑には激しい痛みが伴ったことが前提とされているものの、より「辱める」側面が強調されています。イエスの場合にも、人が集まる場所に連れて行かれ、裸にされ、「これはユダヤ人の王イエスである」という小馬鹿にした罪状書きが頭の上に掲げられていました。そして、通りすぎる人はそれを見て、ののしったのでした。

十字架に架けられた人は死ぬまで数時間、ときには数日間痛みと辱めを耐えなければなりませんでした。本日の箇所は、その痛みを耐えている間の出来事です。

さて、二人の犯罪者についてですが、イエスが十字架に架けられたとき、イエスだけでなく二人の犯罪者も一緒に架けられていました。この 39 節ではその片方の語ったことばが記録されています。片方の犯罪人は、見物人と一緒になり、イエスをののしってその生涯を終えたのでした。

そのののしりのことばは「おまえはキリストではないか。自分とおれたちを救え」というものでしたが、それは見物人の次のようなことばを聞いて、真似たようでした。35 節「あれは他人を救った。もし神のキリストで、選ばれた者なら、自分を救ったらよい。」37 節「おまえがユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」

どうやら、この犯罪人はなんと自身を精神的に、処刑される側ではなく、見物人側に置いていたのです。自分のことをまったく客観的に見ていないのです。

客観的に見れば、まったく非理性的で馬鹿げた行為であります。ところがその振る舞いは不思議なほどに、ルカの作り話に思えません。現実を見ると、同じような姑息な言動が日常にあり触れているからです。この人は極端な人なのではなく、むしろ墮落した人間の本性をそのまま現しているといっても言い過ぎではありません。

墮落した人間には、自分の客観的な恥ずかしい現実から目を背ける、強力な力が働くものです。そのような習性があることが他人については見出すことができても、自分に見出すことができません。自身の恥から目を背けているという意識さえないのです。自意識の中で、理想化した姿で自分の本性を覆い隠しているのです。

その「強力な自意識」がどれほど強力なのが、この犯罪人の姿において分かりやすく現れています。ローマ人が苦勞して、人に精神的な苦痛を与えようと作り出した十字架刑でさえも、この犯罪人を精神的に砕けませんでした。恥はかいたでしょう。社会的にも失ったものもあったでしょう。ですが、その精神そのものと言える「強力な自意識」は健在で、それは自分を庇う方向に働いていたのです。プライドの核にある部分がびくともせず死んでいったのでした。それほど人間の心は図太いのです。

ところが、同じく十字架に架かっていたもう一人の犯罪人は正反対の反応をしたのでした。恥を積極的に受け入れ、自分の十字架に架かったありのままの姿を認めたのです。40 節が

ら 41 節をお読みします。

40-41 節

40 すると、もう一人が彼をたしなめて言った。「おまえは神を恐れないのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。

41 おれたちは、自分のしたことの報いを受けているのだから当たり前だ。だがこの方は、悪いことを何もしていない。」

マタイの福音書のほうでは、ふたりの犯罪人がともにイエスをののしっていたことが記録されています。すると、この箇所のみつたりの犯罪人は十字架に架かっている間に、イエスが本当に悪いことをしていないと気づき、悔い改めたということになってきます。なぜイエスが本当に無罪だと気付いたかは推測することができます。

この犯罪人はもとよりイエスの噂は耳に入れていた可能性が高かったでしょうし、見物人がののしることばかりしても、イエスは自分がメシアだとしていた事実をすぐに理解したでしょう。ですが、それはこの犯罪人にとっては決定的ではなかったようです。最初はののしっていたからです。

最終的には、十字架上で目撃した「十字架に架かってからのイエスの振る舞い」がこの犯罪人には決定的だったようです。見てみると、十字架に架けられているのが詐欺師のような人物ではないということが明らかだったのでしょう。偽りを語っていたのはイエスではなく、ののしっている見物人たちのほうだという恐ろしい事実気付いたのです。

すると、この二人目の犯罪人は、口でののしりながらも、そのたましいは無意識に救いを求め、その目でイエスの振る舞いを探っていた、ということでしょう。そのあたりが、自分のプライドを守ることに意識が集中していたもう一方の犯罪人とは決定的に違ったのです。そして、それがふたりの犯罪人を大きく別けることとなったのです。

ルカは、このふたりの犯罪人の内面を、その口から出たことばを通して描写します。ここで一度立ち止まり、このふたり目の言動から何が読み取れるのか確認していきたいと思ひます。

まず、ですが、この 40 節は、この人がすでに思い直してから発せられたことばだと見るべきでしょう。彼はしつこくののしるもう一方の犯罪人の様子を見て、たしなめます。この「たしなめる」ということばですが、原語ですと、「不快感を示してその行為をやめさせる」といった意味があるようです。つまり、もう一人を上から目線で叱っているのではなく、た

だ不快に思って我慢できなくなったということでしょう。

そのたしなめることばは「おまえは神を恐れないのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか」とはじまっています。そのように言う犯罪人自身の心は当然、すでに深い恐れに支配されていたと見るべきでしょう。その恐れは死ぬという事実に対する恐怖ではなく、神に対する恐れでした。「自分が今まさに体験している耐え難い苦痛が、神ご自身からのさばきだ」ということに対する恐怖でしょう。

その恐れはどこから来たのか。それは理屈をこねた結果として表面化した恐れではなかったでしょう。むしろ、犯罪人は自己正当化をやめただけで、その途端、自然に、ひどく恐ろしく感じるようになったと見るべきでしょう。自分は罰せられるべき、死ぬべき人であると深いところで納得するだけで、人は神をひどく恐れるのです。これが、心が砕けたような状態です。

その体験はこの人の人生で初めての体験だったでしょう。自分のたましいの状態が客観的に見るできるようになり、その結果として、最後の最後に救いの必要性を肌で感じたのでした。

このようにしてこの犯罪人は、目が覚めたかのようにすべてを正直に見ることができるようになり、人間として感じて当然の恐れが芽生えました。それで、もう一方の犯罪人がなぜののしり続けることができるのかが分からなくなってしまったのです。「おまえは神を恐れないのか」という問いでたしなめている背景にはそうした、「自分には当たり前に感じられる恐れが、もう一人には感じられないこと」に対する驚きがあったのであります。

続く指摘も、もっともなことでした。「おまえも同じ刑罰を受けているではないか。」このように言われたら反論しようがありません。このように、当たり前の事実がその意識から欠落しているという罪の本質そのものを指摘したのです。

犯罪人は続けます。「おれたちは、自分のしたことの報いを受けているのだから当たり前だ。」この犯罪人の気付きは、刑罰を受けているという事実にとどまらず、それが正当な報いであるという事実にも及んでいました。悪いことをしたのであれば、報いを受け入れるのは当然でありますので、これも当然のことしか言っていないと言えばその通りであります。

ただ、もう一方の犯罪人の例からも見て分かる通り、人は必ずしもその「報いは当然」という原則を自分には当てはめません。いや、当てはめる人は限りなくゼロに近いと言っても

いいでしょう。自分の罪を認めたとしても、「悪いことをしたが報いは受け入れない」という態度をもって認めるのが、ほとんどの人にとっての限界なのであります。自分を守る強力な自意識が働くからです。

ですので、この犯罪人の告白は当然のことしか言っていないからと言って、それが墮落後の人にとっては奇跡的な発言であったということを見失ってはなりません。

しかも、これは「罪の告白」という宗教的なわざとして言っているのでもありません。もう一方の犯罪人との会話の中で無意識に出たことばです。だからこそ、これは心の底からの思いなのだと分かります。いや、「罪の告白をした」ということばを持ち出すのもおかしいことです。犯罪人は罪を告白したとさえ思っていないでしょう。むしろ、もう一人の犯罪人がしつこいのが嫌になり、怒りを覚えたので無意識に本音が出たまでだったのです。ですので、まったく偽善が見られないのです。

この犯罪人の意識は次に、自分たちと対比する形でイエスに向かい、次のように言いました。「だがこの方は、悪いことを何もしていない。」目が覚めて、自分の落ち度を正直に見つめることができるようになったこの素直な犯罪人の目には、どうしてもイエスに落ち度が見られなかったのです。そしてそれは単に、「十字架にかかるほどではない」ということではなく、なんと、この十字架にかかっている人物が神であるという意味で言っていたのです。42 節。

42 節

そして言った。「イエス様。あなたが御国に入られるときには、私を思い出してください。」

ここで犯罪人は、明らかにイエスを神だと見えています。すべての権威が、十字架にかかっているこのお方にこそあると気づいていたのです。

ここで注目すべきはこの場で、この犯罪人だけが深いところでイエスが神だと気付いたという事実です。ではなぜ、もうひとりの犯罪人も、ローマ兵も、パリサイ人も、他の見物人も、何も気付かなかったのでしょうか。なぜこの犯罪人だけが気付いたのか。

この問いに対して、聖霊が働いたからこの犯罪人が理解に至ったとする人がいます。そのような側面も否定すべきではないでしょう。ですが、それは本質から少しずれているのではないのでしょうか。

ルカの記録した内容を見るとき、もう少し別の論理が浮上します。先ほども申し上げまし

たが、ルカは、イエスが神だと気付いた犯罪人と、ののしり続けた犯罪人を対比しています。ののしり続けたほうは、その強力な自意識が働き、自分の姿を見ることを拒みました。しかし、もう一人は、目が覚めたかのようになり、自分の歪んだ姿が正直に見られるようになっていたのです。

この正しいほうの犯罪人が自分の歪んだ姿を正直に見られるようになったことと、イエスが正しい人だと分かったことは無関係ではないでしょう。福音書の記事を読んで結果だけを見れば、最終的にはローマ兵や見物人の中の数人も、イエスが死ぬ光景を見て、イエスが神だと思いました。実は、その場にいた人はそのことをずっと臆げに感じていたのです。ですが、ローマ兵や見物人の理解は知的なものにとどまったのです。彼らは、たましいの救いが必要な者として神であるイエスに接したのではなく、自分を正しい者とする傲慢な者としてイエスを知ったに過ぎなかったのです。ですから、イエスが神だったという気付きは自分たちと無関係な知的な事実にとどまっていたのです。いや、認識としてはイエスが「神」だと思ったのではなく、実質的には「自分と同じかわいそうな人だ」というレベルの認識だったのではないのでしょうか。

ですが、正しいほうの犯罪人はイエスに対して、まったく違う態度で接しました。自己正当化する偽りの日常から目覚め、深刻な課題を抱えている罪人としてイエスの前に出たのです。ですので、この人にだけ、イエスが神だという事実の意味が違ったのです。いち罪人として、この方の他に希望がないと悟ったからです。

その発言の内容に進みたいと思いますが、犯罪人は次のように言いました。「イエス様。あなたが御国に入られるときには、私を思い出してください。」この発言の短さ、そして、「思い出してください」としか言えていないことから、この犯罪人が感じていたキリストとの距離を読み取ることができます。自分は神から遠い存在だという自己認識が滲み出ています。他人の犯罪を見て赦しがあるように願わないように、自分の行った悪についても赦しを簡単に願えないのです。だから、もうイエスの決める通りで良い。そういうことでしょう。

そのような態度で接してきた犯罪人にキリストは応答します。

43 節

イエスは彼に言われた。「まことに、あなたに言います。あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます。」

この犯罪人はイエスとともに、その日のうちに、パラダイスにいるということが宣言されます。最後の審判を待つことなく、死んだ直後にそこにいるという意味です。

この犯罪人は殺人をしていた可能性が高いような人でしたが、神はそれを、パラダイスに行くことを阻むことだと考えなかったのです。いや、報いを免れることはありません。生きている間に、死んだ方がマシだと思えるような拷問を通っています。イエスはこの人を十字架から救わなかったからです。犯罪人本人さえも、十字架から降ろされることは正義と反すると考えたからか、十字架の痛みからの救いを求めません。それを受けるべきものと認めていたのです。

ですので、クリスチャンであろうとなかろうと、自分の働いた悪事については、責任を負うこととなるのです。それは、当然のことです。人は自分のした悪事を忘れませんし、人はそれを赦しません。その責任を負う必要があるのです。そして、この犯罪人のしたことの報いとしては、十字架刑がふさわしかったのです。

ただし、責任を負わされるのは対人的なことであり、神との間の責任はイエスを通して赦されていたのでした。それは、悔い改めたからでした。

では、まとめと適用に進みたいと思います。今朝はこの箇所に登場したふたりの犯罪人の対比を通して、パラダイスに行く者とそうでない者の決定的な差はどこにあったのかということを見てきました。それをひとことでまとめるのであれば、自己正当化する「強力な自意識」が健在かどうかでした。ひとは、十字架に架かりながらも、強力な自意識が働き、最後まで自分の姿をみつめることがありませんでした。もうひとりのほうは、その強力な自意識そのものが砕け、もう自己正当化をすることをやめました。それで、このふたり目には、神に対する恐れがあり、イエスが神だという気付きがあり、また救いを求める心も芽生えましたが、それは二次的なことでしかありません。自意識が砕かれれば、これらは自然に出てくるものであります。決定的なのは、自我が砕かれたかどうかということだということを見失ってはなりません。最終的には、信仰告白したかではなく、その告白の背景にどのような態度があったのかが問われるのです。

この自意識が砕かれているのかどうかということについてですが、これは罪を告白することと同等ではないということにも注意しなければなりません。ここで問題とされているのは、理性的な告白なのではなく、態度の領域に属するものであります。

日本では個人の謝罪会見がしばしばニュースになることがありますが、そこでも、発せられる謝罪のことばの内容よりも、まず態度が問題とされます。謝罪に誠意があるのか、また復帰しようとする思惑があるのか、どのような報いを受けるつもりなのか、など、厳しく追求

されます。

謝罪する本人は誠心誠意の謝罪のつもりであっても、ほとんどの人は謝罪で横柄な態度が見えてきて、かえって油に火を注ぐこととなってしまいます。

それにこの犯罪人たちを当てはめるのであれば、ひとりは態度が悪くて反省の様子がありませんでした。しかし、もうひとりは十字架で痛みを受けながら、また恥ずかしい姿を晒しながら、それが当然のことだと言って死を受け入れ、言い訳もせずに黙りました。もうこの世に復帰することを考えていませんし、名誉の回復も求めています。まったく防御を解除してしまい、すべてを認めてしまった状態だったのです。この後者であれば、赦すことはなくても、加害者としては当然の態度を取っているとは言えるのではないのでしょうか。

では、私たちクリスチャンはどうなのでしょう。自分の罪の告白は、世間の厳しい目から見てもまともなものだったのでしょうか。本当に自分が悪いと認めているように、世間の人々も頷く内容だったのでしょうか。謝罪会見に出しても恥ずかしくない内容だったのでしょうか。

もしそれが、人が頷かないような内容であったのであれば、さらに基準の高い神の目にもほとんど意味のない告白だったということにならないのでしょうか。すると、この犯罪人がどれだけ誠実な態度であったのかということが見えてきます。人よりも遥かに厳しい神の前で、その罪への向き合い方と、キリストに対する態度が、十字架上で認められたのです。

もう一方の犯罪者は、最後まで意地を張っていたと言うだけでなく、そもそもその人生のすべてが神に敵対したものであり、意地を張り続けていた人生でしかなかったと言えます。その意地は実に下らないことでありますが、それがやめられないのが人間です。このように整理しますと、なぜ御国に入れる人が極僅かであるのかがよく分かるのではないのでしょうか。

では、教会において、罪を認める際の態度について十分教えられてきたかと言えば、十分ではありませんでした。キリスト教は罪の告白の「ことば」やその背景にある「教理」にばかりこだわり、その態度については、ほとんど教えてこなかったのではないのでしょうか。また、キリスト教会のなかで伝道の様子を見ていますと、正しい罪の告白を相手にさせるところか、「相手のプライドを傷付けないように、罪の告白をさせる」ことができる人が立派とされて来た面がなかったのでしょうか。「あなた」が罪人だとは言わず「すべての人」が罪人だと言って全人類的な問題にすり替え、また犯罪人みたいな「覚えてください」という謙遜な態度で神を求めるように教えるのではなく、「あなたはキリストを受け入れますか」と、

あたかも人間側が上から目線で受け入れれば良いかのようにするのが正しいとされてきたのではないのでしょうか。

つまり、教理自体が人の罪を暴く方向に働くのではなく、人々の強力な自意識に寄り添う働きをしてしまっているのです。教理を知ること、人はさらに自分の正しさを確信して、されに癒し難いパリサイ人のような「宗教的偽善」に陥ってしまう危険性があるのです。

それでも、最終的には他人に責任をなすりつけることはできません。自分が、個人としてどう罪の問題に向き合ってきたのかが、最後の審判では問われるからです。

では、具体的に私たちはどのようにすれば良いのでしょうか。たとえ、出来る限り正直に罪を告白しようとしても、無駄でしょう。ほとんどの場合、本人が正直だと思っている告白でも、周りが聞けば偽りに満ちているように聞こえるものです。

たとえ、自分の肉体を罰しても、それにも効果がほとんどありません。人の自己正当化するその自意識は、十字架上での拷問にも屈しない、強固なものだからです。

教理的に物事を整理したとしても、罪を深いところで認めていない人は、その教理を自己正当化の道具として使ってしまいます。

ですので、たどり着くべき神の前の正しい態度を目指してみますと、必要なのは小さな一歩であるものの、頑張れば頑張るほど、墮落した人間にはそこに超えられない救いとの壁があるかのように見えてくるのであります。それでも、自分の努力が無駄だったと納得するまで、あらゆる無駄な努力をする必要があるのです。

少し概念的な話となってしまいましたので、最後により具体的に、今日からできることをお話しして終わりたいと思います。すべきことは語りきれないほどありますが、一つだけ、今朝の箇所との関わりでお話します。

神様は、この犯罪人を十字架刑にしましたが、それもこの犯罪人のたましいにとって、最終的にはよかったのです。自分の罪について納得できたからです。

神様は私たちに対しても同じように働き、説得を試みます。それは、突然素直になるように心に働きかけるとか、そういったことではありません。むしろ、その働きは十字架刑と似た方法で私たちに降り注いでいます。

その具体的な形はそれぞれでしょうが、一つ、より普遍的な形ですべての人に与えられています。それは、周りの人を通してのものです。神様は私たちのまわりに家族を置き、また近所の人、友達、職場の人間、教会の人たち、牧師を置きます。そして、私たちは付き合いが長くなると、そのほぼ全員に、何回かは批判されるのです。中には、日々なじってくる、相手の欠点を一つも見逃さない「なじる人」も神様ご自身が周りに置かれるのです。その人たち自身にも数えきれないほどの欠点があるのにもかかわらず、平気でなじってくるのです。

そのなじることばは言いすぎのことが多いのですが、いつも「一理ある」のです。神様はそのようななじる人を通して来る日も来る日も批判のことばを送り、私たちに働きかけているのではないのでしょうか。つまり、いくら自意識の中では自分を正しい人だと思っていなくても、実はその心に汚れが満ちている、と説得しているのです。それは墮落したたましいにとっては、十字架の上でののしられるよりもさらに効果的な説得する力なのではないのでしょうか。ただし、最終的には、私たちがその声を聞くかどうかにかかってきます。

私たちは周りの批判的なことばを簡単に跳ね除けるのではなく、それを吟味し、その正しい部分は認めなければなりません。あのイエス様の隣で十字架に架かった人がそうであったように、最終的には私たちも無防備な状態になり、「自分はひどい人だった、自分は報いを受けて当然の人だった」、と納得するレベルに到達しなければなりません。

私たちは日々、何年、何十年もかけて批判を受ける時に、衝動的に自己防御をし、相手の欠点を数えたてるような人であってはなりません。それは、イエスをののしったほうの犯罪人と同じ道だからです。むしろ、批判されたときに、そこに神の働きを認め、自分の問題はどこにあるのかと静かに反省する者でありたく願います。これが、正しいほうの犯罪人が歩んだのと同じ道であり、それこそが自分の十字架を負ってキリストについていく道だからです。

祈り：あわれみ深い父なる神様

私たちは自分の心を見るときに、自己正当化する心があったことを認めざるを得ません。

そんな私たちを案じて、あなたは私たちの人生において、すでに働いていることを感謝いたします。私たちが周りに批判を受けるときには、それが当然の報いだと受け入れたいと願います。どうぞ、私たちがあなたを恐れるようになるまで、続けて導きを置いてください。イエス・キリストの御名によりお祈りいたします。アーメン。